

# UIFA JAPON NEWSLETTER

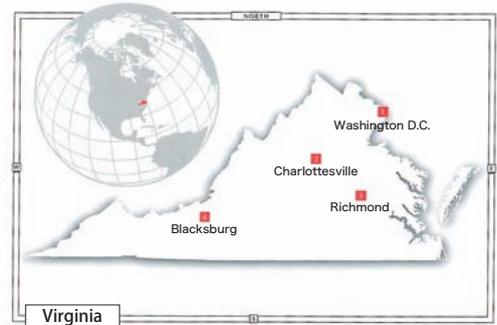


No. 102 Nov. 25, 2015

Union Internationale des Femmes Architectes Japon

## ■主な内容

第18回UIFA世界大会@USA-IAWA設立30周年との共催  
ワシントンDCの3日間と連邦議事堂の印象記  
ワシントンからのバス移動とバージニア工科大学  
松川・中島のプレゼンテーションと各国の印象的な発表  
各国のパネル展示  
「私のお気に入りの一枚の写真」  
写真で綴るポストコングレスツアー  
第63回海外交流の会 - ライトの落水荘とユースニアン・ハウス -  
IAWA30周年記念行事として開催されたイベント  
被災地通信(12) 被災地ツアーから見えたもの  
この指とまれ+会員の本「デンマークの住まいとまちのデザイン」



第18回大会の開催都市を地図にプロット

## 第18回UIFA世界大会@USA—IAWA設立30周年との共催 18th UIFA World Congress and IAWA 30th Anniversary Exhibition in the US

松川 淳子  
MATSUKAWA Junko

第18回UIFA世界大会は、設立30周年を迎えたIAWAとの共催で「建築関連領域における女性の役割と力」をテーマに開催された。日本からの参加者は14名、参加者が最も多かったのはモンゴルの16人で、それに次ぐ数となった。いつもたくさん参加する韓国勢は、スケジュールが重なったということで3名だった。概要は以下の通りである。

- ・大会期間：2015年7月26日～31日
- ・ポストコングレスツアー：同7月31日～8月3日
- ・参加国：14カ国
- ・参加者数：70人
- ・展示参加数：13
- ・プレゼンテーション：25タイトル（基調講演含む）

大会では上記のプログラムのほかに交流行事・パーティーなどがたくさんあり、大変楽しい大会となった。また、バージニア工科大学の教授陣が事務局（実行委員会）を担当しただけあって、いかにも大学らしい「塔をテーマにしたワークショップ」とランチタイムにその講評があったこと（おそらく歴代大会初の試みであろう）、IAWAのアーカイブにポートフォリオが収蔵されているリリア・スカラの孫娘による「Lilia!」という独り芝居がブラックスバークの劇場で上演されたことなどがあったのも大会を特色づけた。輸送の問題、見学場所の問題など

を考えると、ワシントンDCで幕を開け、ブラックスバークをメインの会場としたことなども、見学や交通の便などの点から成功だったと思う。IAWA 収蔵作品の30を選んで紹介した「30×30」のプレゼンテーションも、多くのUIFAメンバーにとっては、IAWAをより身近にすることになったであろう。ポストコングレスツアーでは、ウエストバージニア州、ペンシルバニア州を回り、落水荘、ケンタックノブなどの名建築をはじめ、ウィンチェスターのようなアメリカの歴史的な地域をも満喫することができたし、ド・ラ・トゥール会長が前回大会と変わらない笑顔でお元気に全行程に参加してくださったのも大会を大いに盛り上げた。

気になる次回大会については、2年後ということ、30日のお別れ朝食(VTの建築学科の図書室で開かれた!)の際に、アルゼンチンが手をあげた。ロサリオからは、今回も4名のおなじみが参加していて、事務局を担うことが期待できそうである。この場で、18回大会の「声明」が出され、「女性建築家のパイオニアたちの資料を、将来の世代のために発見し保存することに協力しよう」ということが発表された。

大会に参加する意義は各人それぞれのものがあると思うが、私にとっては、世界中から集まる新旧の友人に会うことも大きな意義のひとつで、今回もたくさんの友人に会い、楽しい日々を過ごした。大会運営を担ってくれたVT陣営に心より感謝したい。



UIFAとIAWAをアレンジしたシンボルマーク

7月29日レーンスタジアムのホールで開かれたレセプション。ドレスコードはトラディショナルドレス（写真：岩井）

## ワシントン DC の 3 日間と連邦議事堂の印象記

小川 信子

3 Impressive Days in the US Capital OGAWA Nobuko

7 月 25 日ー成田発 11 時ー日付変更線通過ーダレス空港に 10 時 40 分頃到着ーバスでワシントン DC のホテル・リエゾン・キャピタルーユニオン駅で昼食ービルディング美術館

アメリカの中心都市であるワシントン DC 入りをした。第 18 回 UIFA 世界大会のため、世界から女性の建築家が集う。

空港から市内に近づくにつれて、政治の中心地である巨大アメリカの首都に、圧倒された。広大な土地に、開拓精神の歴史が刻まれており、名実ともに強大な国家を創りあげた姿を見る思いである。

ホテル到着後、荷物をほどく暇もなく、ユニオン駅のフードコートへ（日本の駅中レストランとは大違い、雑然とした中での食事）、その後、直ちにビルディング美術館に出掛ける。皆のエネルギーに驚きながら、後を追うことになった。

26 日ー近くのカフェで朝食ー10 時頃ダックツアー水陸両用車で市内観光ーホテルで会議参加登録ースミソニアン博物館ー18 時過ぎ小オープニングパーティーハイアットで夜食

朝食はホテルの近くのカフェで済ませる。10 時頃から、水陸両用車の観光バスで市内観光に出掛ける。ワシントン DC の市内は、かつて訪れたニューヨークとは異なり、整然とした建物群は、生活者の街というよりは、アメリカ合衆国の政治の要として、その威厳を保っているという印象であった（もっとも中心部しか見学していないことにもよる）。

夜のバブでの小オープニングパーティでは、なつかしい面々に出合い、再会を祝い合った。

27 日ー8 時 45 分ホテル出発ー連邦議事堂と議会図書館の見学ー肖像美術館中庭で昼食ービルディング美術館ーベトナム戦没者記念碑ーA I A ロビーでオープニングパーティ

連邦議事堂の見学は、建築そのものも大変興味深かったが、様々な空間構成に興味を感じた。議会図書館と長い地下廊下で連絡されている。偉大なる国家である議会図書館の歴史およびトーマス・ジェファーソン館を見学した。

また国立彫像ホール所蔵の彫刻群の中で、ひときわ目を引きつけられたのは自由の像である。1857 年ローマで活躍していた米国人彫刻家トーマス・クラウフォードが石膏で製作したものである。彼の死後、彫刻家クラーク・ミルズが銅像を鋳造した。その折り、奴隷職工フィリップ・クードが 1863 年完成させた。その完成した功績をもって、彼は奴隷から解放されたと言う。この自由の像は、アメリカの歴史を物語っているといえよう。1863 年 12 月 12 日、自由の像は、イーストプラザの真上 287 フィートにあるドームの頂点に設置され、街のどの位置からも見られる（連邦議事堂訪問者ガイド参照）。また、米国の精神の象徴として立ち続けているかのようである。



連邦議事堂に近づくー改修工事のドーム頂部に自由の像（写真：宮本）

## ワシントンからのバス移動とバージニア工科大学

中野 晶子

Enroute from Washington DC to Virginia Tech

NAKANO Akiko

車窓に広がるなだらかな緑の丘の綾なす風景は、400 年前まで原住民たちが独自の循環で自然に暮らしてきた恵み多き大地を継承し、のびやかに整備されたプランテーションごとに住宅が点在している。バスで移動中に、バーモントに住む米人が涙ながらに語ってくれたインディアン史は、ワシントンにある最新の「国立アメリカ・インディアン博物館」の展示に詳しいが、そのカルチャーとともに米国の大切な原点でもある。

シャーロッツビルにバージニア大学構内には、煉瓦造の 2 階建ての小棟が 10 棟で「コ」の字型に連なる中庭形式のものが中心にある。要のロトンドは修復中で、仮設膜にはそれぞれの部位の詳細写真が転写されていて、世界遺産への気遣いが伝わる。第三代大統領ジェファソンがリタイア後ローマのパンテオンを旨として設計、ディテールも決め、欧州から教授陣を招聘した大学で、大きな家ほどの小棟にはそれぞれ大きめの食堂があり、教授と学生の共同晩餐の場を提供している。小棟を繋げている外廊下は背後に宿泊個室を連ねて、「Lawn」中庭に面している。ここのエンタシスの効いた円列柱は、断面はパイを小分けした形、縦断面は直径を増減した寸法のレンガで焼き、積んでプラスターで固め、砂岩の柱頭を擁している。この砂岩の色でフレーム枠をペイントしていたのがオリジナルで今はホワイトペイント。

バージニア工科大学のキャンパスは、学生が自転車を移動手段とする程広大で、ブラックスバーグの街にあるリリック劇場も大学施設の一部である。おおむね建物はグレイッシュな石材で外観が整っていて、会議場併設の私達のホテル（147 室）は年間を通じて父兄や会議参加者でほぼ満室とのこと。アメリカンフットボールの競技場 V I P ルームでお国柄表明のパーティーの折、雨天リフティングだけの体育館の存在も聞くとチームが強いのも納得。24000 人以上の学生が学び、学内戦没者の慰霊碑+チャペルが舞台のように設定された大きな芝生の広場では、軍隊行進のイベントも開催される。

大会運営の要 = Dona Dunay 教授の夫、Robert 教授の設計された、完全循環型自然エネルギー住宅「ルーメンハウス」にはエコなアイディアが満載で、1:3 のプロポーションの長方形内には、引き戸や雨戸などの他「折りたたむ」発想に満ちている。これを学生とともにミラノなど計 3 箇所で建設した事は意義深い。IAWA デジタル展示を開設した Cube のあるモス・アートセンターは、街にも開放されており、コウギ・ホールの芸術建築図書館閲覧室での最終日の朝食付き会議は圧巻であった。



バージニア大学 Lawn: 円列柱のある側廊から中庭越しに反対側の小棟を見る。

松川・中島のプレゼンテーションと各国の印象的な発表  
 中島 明子  
 Overview of Presentations  
 NAKAJIMA Akiko

口頭発表は、日本では考えられないルーズさで、しかしヒューマンな雰囲気になった進行で行われた。何しろ、誰がいつどこで発表するのかわからず、何度も問い合わせようやく小さな文字で書かれたプログラムを入手。続いて事前に送ったアンケートが用意されていないし、松川さんと私のプレゼンに付けた紹介が無い。「これがヴァージニアスタイル！」と心した。

さてプログラムによると、29日、30日の午前中、基調報告後は2つの会場に分かれての発表だ。私たちは2日目。会場は29日が宿泊している《ヴァージニア・テック・イン》の会議室。翌日は…再び大変！朝食と発表会場の予定変更が周知されず、ピストン輸送で会場となるヴァージニア・テック建築学科に着いたのは予定から1時間近く過ぎてから。用意された美味しい朝食を片手にポスター展示を眺め、製図室等に入れ子になっている会場に、ドナをはじめ主催者側は全く動ぜず、基調報告とプレゼンがスタートした。

2日目の私たちの報告は、前半を松川さん、後半を中島で、UIFA JAPON で実施した会員アンケートの概要を報告し、アンケート協力のお願いで終わった。2人は事前に十分な打ち合わせもできなかつたが無事に終了。通訳はヴァージニア・テックの大学院生の大庭夏実さんが的確にやってくださって有難かつた。

セッション終了後に2人に呼び止められ、大変興味ある報告だったと言われ、家事育児の分担等の話となった。何よりも嬉しかつたのは、ブラックスバークでの夕食後、通りかかつたドナさんから、「プレゼン面白かつた」と言われたこと。

報告で印象に残つたのは、○基調報告の Susannah C. Drake さんの、ランドスケープと女性の歴史と N.Y. の持続可能な再生計画。後者は水路から流れ込む汚染水を浄化するスポンジ公園を含むスポンジプロジェクト、都市部の高層建築開発費を沿岸部のランドスケープ保全に充てるといった刺激的な内容であった。他には○ドキュメントフィルムを使ったカメルーンの Amélie Essessé さんの「女性による歴史的建物保全」、○スペインでの建築設計競技による作品を紹介した Carmen Espejel さん、○伝統的なバルカン様式を新しい言語に読み替え黒海沿岸バルシックに多くのヴィラを設計し、共産圏時代、歴史的教会を破壊から守つた女性建築家の報告をされたルーマニアの Maria Urma さん、そして中野晶子さんの作品を初めて拝見した。



松川・中島発表と通訳の大庭さん(右)(写真:井出)

各国のパネル展示  
 Panel Exhibition  
 正宗 量子  
 MASAMUNE Kazuko

パネル展示参加は全部で13点。内日本から8点の展示があつたのは素晴らしかつた。石川+小池、井出、稲垣、岩井、中野、松川+森田、宮本他災害復興見守りチーム、正宗の8点のパネルは、それぞれが日頃設計や研究成果の写真と解説だ。シニアや高齢社会問題、幼児施設など色とりどり。趣の違つたパネルは、2007~2015年のカレンダーを纏めたパネルだつた。中越地震以後毎年、ボランティアで行く新潟県法末集落に咲く可憐な花々や景色、住まいや祭事を撮影し作成した見守りチームのカレンダーパネルだつた。

第18回UIFAアメリカ大会に参加する方法に、展示にだけ参加し大会には行かないという方法もある。今回の展示は、これ迄にない程少ない展示参加数だつたのでひと際そう思うのかもしれないが、今後、大会の一課題だ。

他国の参加は5点。韓国2点、ルーマニア、アフリカ(カメルーン、フランス在住)、アメリカの各1点。アメリカはヴァージニアのモダン建築など現代に視点を置くもの。ルーマニアの Maria Urma さんは『木の家』プロジェクトの報告。又、カメルーンからは、「女性に担われる伝統的な住まい」の紹介。特筆すべきは、韓国の女性建築家のパイオニア Chi Soon 池先生の展示パネルだ。高齢な先生は大会に欠席。The Bank of Korea 他数々の業績を讃えたパネルだつた。しかし、もし日本から8点の参加がなかつたら、一体このホール空間は?! 一昨年の東日本大震災の“だれでもフォトグラファ”展示の賑やかで生き生きとした笑顔の作品パネル展示どうしても重なつた。

予め既定のパネルサイズはA1。縦・横自由に選択。このパネルを自作持参したこれまでの大会とは違い、好評だつたのは公式にPCから直接資料を送信し、現地主催者によって出力・シート作成をしていただけた事だ。

展示会場ホールは、その他、ヴァージニア工科大学の学生によるスケッチ10枚と1888年から1999年まで世界の女性建築家とその作品について時系列にまとめられた大きなパネルが展示されていた。

その場所で、ワークショップが開かれた。小さな紙を皆に配り、黒ペンで一筆書きならぬ、二筆書きで塔(Tower)のイメージを描くというもの。その作品も展示され、ホールの雰囲気は一変した。その後のガーデンランチパーティで、内3作品が選ばれ、長老のヘイスティングスさんらの講評と3作者がコメントを語る場面があつた。



建築学科ホールの展示パネルの前でワークショップ。テーマは「私が考えるこれからのタワーのイメージを2筆で表現する」。正方形の白紙と筆を渡される。



7/26

ソランジュさんと、写真の小川先生とヘイスティングスさん、さらにワグナーさんを加えた4人は「UIFA オーバーエイティーズ」。

中島 明子



7/26

私のベストショットは初日ワシントンDC オープニングレセプション終了後、会場のアイリッシュパブ・ザ・ダブリンの前。再会を楽しみ「伊達の一本締め」で締められた後の面々です。

岩井 絃子



7/27

いつもながら元気に登場したド・ラ・トゥール会長は、満面の笑みで登録デスクで参加登録を済ませられた。その後、朝食会に拍手で迎えられて、パンも果物もバクバク！このエネルギーはどこから来るのだろうか？

宮本 伸子



7/27

国会議事堂の見学者の多さに大変驚き、ひるがえって、日本の国会議事堂の見学はどうなっているのだろうか、見学者数はどうなんだろう、といろいろ考えさせられました。

山田 規矩子  
(写真：野田 杏菜)



7/29

アメリカは自由の国だから今回はドレスコードはないのねと思っていましたら、何と前日に伝統衣装をという連絡があり、驚きましたが、皆様ご自分らしい美しい装いでご出席でした。ドナさんと小川先生、UIFAの方々の写真は大事な一枚です。(私もそれらしきものを探し出し着用しました。)

石川 弥栄子



7/29

スミスフィールド・プランテーションの敷地内の小屋。東欧・中欧ルーツの移民が積み上げたログハウス、コーナーのジョイントはアクリルジョイント的だ。アメリカで最も有名なログはケンタッキー州にあるリンカーンの生家だという。

井出 幸子



7/29

ブラックスバーグのファーマーズマーケットは、2回目だが、道の駅のように手作り感と親しみがあって、良い雰囲気でした。

河内 眞作  
(写真：岩井 絃子)



7/27

大雨で一度は訪問がキャンセルされたが心優しいUIFAアメリカ人スタッフが連れて行ってくれたマヤ・リン設計によるベトナム戦争犠牲者慰霊碑。到着した途端に晴れ間が。

野田 杏菜



7/27

マヤ・リンによる「ベトナム戦争犠牲者慰霊碑」：「パイオニア展」で取り上げて以来、ぜひ見たかったもの。年間来訪者300万人。献花や手紙が絶えない。

松川 淳子



7/31

ホテル玄関前で送迎バスを待つ間に、歌を歌い、ダンスステップを踏むアルゼンチン・韓国・日本等のメンバー。言葉は無くとも心は通う。

稲垣 弘子



8/1

Kentuck Knob は、日本訪問以後、畳のモジュールに影響されたライトの後期の設計手法でユースニアハウスに属している。どうしても石垣上の六角形の光を作る庇を撮りたく、玄関脇の右の道を降りて見上げた。

正宗 量子



8/2

落水荘のゲストハウスへ続く渡り廊下のコンクリートの屋根が、折り紙の様に軽やかに折れ曲りながら登っていく。

小川 信子



8/2

1936年竣工のゲストハウスは、落水荘本体のviewを損ねない裏側に配置されて、深いキャンティの庇とこの池が響きあうおもてなし空間。水辺の「あるじ=カエル」君に变身したいくらい。母屋への渡り外廊下は、小川先生の記事参照下さい。

中野 晶子

CONGRESS TIME SCHEDULE

7/26	7/27	7/28	7/29	7/30	7/31	8/1	8/2
Congress Registration (the Liaison) Opening Reception (Pub the DUBLINER)	Tour: US Capital Library of Congress Lunch: Kogod Courtyard Tour: the National Building Museum Free Tour: The Vietnam Veterans Memorial Opening Reception (AIA headquarters)	Travel to Charlottesville Lunch and Tour (The Lawn at UVA) Travel to Blacksburg UIFA Congress Welcome Reception (Moss Center for the Arts)	Keynote Address Delegate Paper Presentation (The Inn at VT) Free Lunch: Downtown Blacksburg Farmers' Market Tours: Walk to Special Collections Exhibits Reception (South End Zone-Traditional Dress)	Keynote Address Delegate Paper Presentation Workshop high rise tower initiative (Cowgill Hall) Garden Lunch Party Closing Keynote Panel Discussion (Hahn Horticulture Garden) Lilia At the Lyric Free dinner: Downtown Blacksburg	Closing formal Breakfast (Cowgill Hall)	Begin Post Congress Tour Tour: Tamarack Tour: The New River Gorge Bridge stay: Hotel Seven Springs	Tour: Flight 93 National Memorial Lunch and Tour: Kentuck Knob stay: Hotel Seven Springs
						Tour: Fallingwater Tour: Winchester stay: Hotel George Washington Wyndham@ Winchester	

写真でつづるポストコンGRESツアー  
My Post-Congress Tour Album

稲垣 弘子  
INAGAKI Hiroko

7月31日(金)UIFA大会閉会后、参加者35名が1台のバスに乗り、3泊4日の旅に出発。VTのレズリーさんがツアーコンダクター役。ユーモアたっぷりの点呼、テキパキとした配慮が最後まで。

- A: 7月31日(金)タマラック・パークを見学、ニューリバー・ゴージャ橋を渡り、一路宿泊先のセブン スプリング マウンテン リゾートを目指し、陽が落ちて真っ暗になる頃ホテル到着。コンベンションセンターのレストランで夕食。
- B: 8月1日(土)午前中は、Flight93 National Memorialを見学。途中、ウォールマートで買い物。昼食はケンタックノブのテント。午後は、2班に分かれてヘイガン邸を見学。



A: 西半球における最も長く、高い(長さ924m 高さ267m)鉄骨のアーチ橋と言えるニューリバー・ゴージャ橋。長い階段状の坂道を下って、見事な全容を眺めることができた。



A: セブン スプリングス ホテル。RC造で外観、内部は木造山小屋風。センターロビーを中心に、両翼にホテルとコンベンションセンターが広がるため、食事の度に長い折曲がった廊下を往復。

- C: 8月2日(日)7時30分出発。落水荘(カウフマン邸)を見学。再びバスに乗り、ウインチェスターへ。ジョージ・ワシントンホテルにチェックインした後、徒歩でShenandoah Valley DISCOVERY MUSEUMへ。旧市街地を散策しながら、DISCOVERY MUSEUMの設計者であるSWARTZ建築事務所を訪問してワインパーティ。夜はツアー最後のディナー。松川さんの乾杯で開始。
- D: 8月3日(月)最終日。ホテルでの朝食時にはお別れの挨拶を交わし名残を惜しむ。ドナ・デュネイ夫妻とパオラさんとホテルで別れ、残りは、ダラス空港、レーガン空港、ユニオンステーションとそれぞれの帰る方向で下車。最後の日本勢がキャピタルホテルで下車。



C: 橋から望むカウフマン邸1935年に建設され、1963年までエドガー・カウフマン・ジュニアが住んでいた。天井一杯のぐるりとめぐる開口が自然の中に溶け込んでいる感覚を覚える。



C: 階数を感じさせない見事なサッシ割り。内開き網戸の軌跡に合わせて割り貴かれたデスクが印象的。



B: フライト93 ナショナルメモリアル 2001年9月11日同時多発テロの1つで、ニューヨークからサンフランシスコに向かって飛行中のFlight93がハイジャックされ墜落。乗客33名、乗員7名の犠牲者名が屏風状の大理石の壁に刻まれている。



B: ヘイガン邸はライトのユースオニアンハウスの中でも優れた建築。菱形モジュールで構成され、テラスの庇には六角形のトップライトが規則正しく並び、奥まで光を取り込む。広大な敷地には35の彫刻が点在。オオカミの彫刻と戯れるソランジュ会長。



C: 綺麗に再生・保存されているウインチェスターの街並み。静けさが漂っている。ファサードを残して改修中の建築現場も見られた。



D: ドナ・デュネイ夫妻とパオラさんは直接ブラックスバークに帰るので、ホテルでお別れ。入念な準備に続き、大会、ツアーと心労が重なったと思いますが、いつもにこやかに対応してくださり、感謝に絶えない。いろいろお世話くださったレスリーさんとドライバーのジョンが大きなバスのままバージニアに戻った。

第 63 回海外交流会 —ライトの落水荘とユースオニアン・ハウス—  
63rd Intercultural Lecture: Fallingwater & Kentuck Knob

岸本 裕子  
KISHIMOTO Hiroko



講師: 遠藤現氏

2015年UIFA世界大会に向けての研修として、稲富昭氏、小林克弘氏に続き、第3弾が7月4日(土)自由学園明日館の大教室タリアセンで開催された。講師は遠藤現氏で、フランク・ロイド・ライトの高弟遠藤新氏の孫にあたる。遠藤現先生は講演の10日ほど前にライトツアーの引率者として帰国したばかりで、最新の写真と情報による講演が行われた。

森を背景に滝の上に建つ落水荘はいつ見ても建築が自然を引き立てていると感じさせる。冒頭の外観写真は水量が多く迫力があり滝の音が聞こえてくるようだ。ベージュに塗装されたバルコニーの水平方向と自然石と木製の窓による垂直方向の組み合わせは、まるで建物が生きていて静かに成長し続けているように感じられた。

内部空間は外部と同じ自然石が使われ連続性が図られている。特に暖炉の前の床は露出する岩を利用して作られていて、家の中なのに大自然に包まれているような感覚である。広い

リビングとは対照的に各個室はコンパクトな造りである。動線には段差があり、造りつけ家具の詳細や配置、光の取り入れ方など綿密に工夫がされている。また増築されたゲストハウスにつながる庇のデザインも面白い。

落水荘から程近くにあるヘイガン邸は、ライト後期のユースオニアン・ハウスの一つである。ユースオニアン・ハウスはアメリカの標準的な家族の為に、手ごろな価格で住み心地良くコンパクト設計された小住宅だ。ヘイガン邸は1.2mのモジュールで菱形のグリッドによりプランが構成されている。壁同士が直交しないプランや、伸びやかに続く低い庇、その庇に空いた連続した六角形の穴など興味深い。

ライト(1869~1959)の活動期間は70年以上と長く、日本においては帝国ホテル建設に携わった建築家を通し大正から昭和初期に始まり現在に至るまで大きな影響を残している。永い時を経ても色あせることなく、愛され続けていく住まいの魅力を今回の講演から大いに感じ取ることができた。

講演会終了後は近くの会場で懇親会が行われ、大会に向けて大いに会話が弾んだ。

IAWA30 周年記念行事として開催されたイベント  
Overview of IAWA's 30th Anniversary Exhibition

宮本 伸子  
MIYAMOTO Nobuko

第 18 回の UIFA 大会としては、従来なかった試みがい  
くつかあったが、IAWA（女性建築家国際アーカイブ）の  
30 周年行事が同時開催されたことも大きな特色だと感じ  
た。そして、大会の最後のメッセージとして、「我々は女  
性の建築家のパイオニアたちの業績を集めることに協力  
しよう」ということで UIFA と IAWA が一体となって開催  
された意義が確認されたのだと思う。

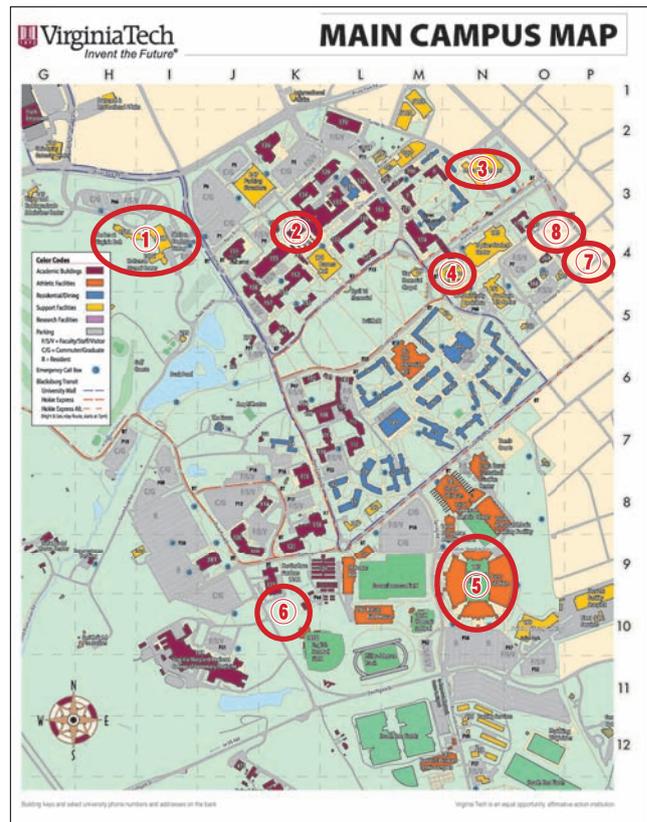
IAWA 関連のイベントとして開催されたものとしては、  
7 月 28 日に VT（バージニア工科大学）のモス・アート  
センターでレセプションの合間に上映された 30×30 と  
題する IAWA のコレクションから選定した女性建築家の  
30 の作品が、CUBE と呼ばれる立方体のホールの壁面に  
画像で投影され、サラウンディング感覚で楽しめるもの  
だった。29 日の午後にはアーカイブのコレクションがあ  
る図書館に行って、パイオニア展で日本でも展示された  
リリア・スカラの作品の実物や、UIFA の設立や大会の歴  
史などが展示された。

30 日の建築学科のコウギルホールの展示では、IAWA  
コレクションのハイライトとして 1900 年前後から 2000  
年ごろまでの、ほぼ 1 世紀の間の女性の建築家の世界で  
の活躍をプロットした大パネルが展示されていた。また  
プレゼンテーションでは「30×30」についてのプレゼン、  
IAWA 創始者のミルカ・プリズナコフの名前を冠した賞を  
得た研究の発表などが行われた。

そしてハイライトはブラックスバークのダウンタウ  
ンの真ん中にあるリリック劇場で、30 日 16:00 から「Lilia !」  
と題する講演が行われたことだ。Lilia Skala（リリア・ス  
カラ）の孫である Libby Skala（リビィ・スカラ）が祖母  
の生涯ーリリアはオーストリア出身で建築家になりなが  
ら女優になり、アメリカに渡ってからは苦労を重ねなが  
らオスカーなどの各賞を受賞する映画やテレビの女優と  
しての地位を確立したという波乱の生涯一を、一人芝居  
として観客に語り掛ける印象的なものであった。



UIFA の歴史も IAWA の展示の中に



ヴァージニア工科大学マップ案内

- ① THE INN  
7/28-7/30 宿泊、7/29 基調講演・発表
- ② COWGILL HALL 建築・都市計画学科  
7/30 基調講演・発表・パネル展示・ワークショップ  
7/31 公式閉会朝食会
- ③ MOSS CENTER of the ARTS  
7/28 歓迎レセプション、30×30 IAWA 30th Year Digital Exhibition
- ④ University Library  
7/29 IAWA 収蔵品の見学
- ⑤ LANE STADIUM, SOUTH END ZONE  
7/29 レセプション：ドレスコード：民族服
- ⑥ The HAHN HORTICULTURE GARDEN  
7/30 テントの下でガーデン昼食会+基調講演+ワークショップ講評
- ⑦ The FARMERS' MARKET  
7/29 見学
- ⑧ The LYRIC THEATER  
7/30 「リリア」観劇。リリア・スカラの孫のリビィ・スカラの舞台



モスアートセンターの CUBE ホールでの「30×30」上映。世界 47 各国、342 人の  
女性建築家アーカイブから 30 人の世界を代表する作品を一挙に公開（写真：中島）

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083

東京都千代田区麹町 2-5-4

第2 押田ビル (株)生活構造研究所内

Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866

E-mail: uifa@LIQL.CO.JP

URL: http://uifa-japon.com

発行 2015年11月25日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON

c/o LABORATORY FOR INNOVATORS  
OF QUANTITY OF LIFE  
DAINI-OSHIDA BLDG.  
2-5-4, KOUJIMACHI, CHIYODA-KU  
TOKYO, JAPAN 〒102-0083PHONE :+81-3-5275-7861  
FAX :+81-3-5275-7866  
URL :http://uifa-japon.com

## 被災地通信 (12)

## 被災地ツアーから見たもの

## Report from the Disaster Area (12)

岩井 紘子

IWAHI Hiroko

震災から4年半。9月5日に開かれた建築士会女性部会東北ブロック会宮城大会で、奇しくも、去る3月にUIFAでまわったほぼ同じコースの被災地ツアーが行われた。

仙台市折立団地の滑動崩落抑止復旧工事完成の宅地を見た。北面斜面を覆う宅地毎の仰々しい擁壁群。戻ること激少なのに80億掛ったとの事、何の為に復旧か。高速道路を南下し宮城県境坂元にて。車窓から3割が空き家という戸建て公営住宅団地を見学。震災遺構検討対象の旧山本町立中浜小学校は、屋上避難で59名児童全員無事だった。2階軒下の浸水高さプレートが、当時の津波の凄さを蘇えさせ生々しい。隣接慰霊碑と共に震災遺構建造物として是非残してと願う。

震災当時栄養偏りの手助けとして立ち上ったボランティアグループ「互理いちごっこ」の手作り弁当を受取り、一早く地域コミュニティ優先型集団移転団地と、公園復興に取り組んだ岩沼市の千年希望の丘で昼食。その後、自力再建型にした被災地域宅地地盤高上げ工事に取組む名取市閑上で、地元復興に活躍中の建築士仲間、針生承一さんから閑上の記憶と題し、又、当時中3で今や大学1年生のボランティアから、自分達若者視線をより有効に生かすべきとの感激的な話を聞いた。最後仙台市荒浜で、住民意向無視した結論ありきの災

害危険区域指定となった口惜しさを、荒浜復興にかかる住民から聞かされた。やや進んだかに見える防潮堤工事や嵩上げ宅盤や道路の工事。気の遠くなるようなこの復興プロジェクト。宮城が誇る美しい田園風景を、初めに観たあの折立団地の空しいコンクリート造作群のように、防災という名のもと、強制執行されて行くのであろう現在の被災地模様です。



旧山本町立中浜小学校 軒下の浸水高さプレートが、当時の津波の凄さを伝える

## ■この指とまれ+会員の本

## 「デンマークの住まいとまちのデザイン」

## Member's Seminar + Publication

渡邊 喜代美

WATANABE Kiyomi

会員の中島明子さんのコーディネートで、デンマーク在住の福田成美さんが「デンマークの住まいとまちのデザイン」を講話。実にさわやかな写真プレゼンでデンマークの「ヒュッゲ」な生活空間、「問題は話し合って解決する」というテナント デモクラシ、共働きの多い国で職住近接対策、未来を守る意識の高さ、断熱性の高い住宅づくり、屋外も住まいの延長、でも共同意識の高さが見えるいかにも気持ちのいい街のデザインに繋がっている。1900年代「快適な暮らしを全ての人々へ」あるいは都市再開発でも「環境にやさしい街づくり」を国策に、「ヒュッゲ」な生活空間を創生してきたが、2000年代には高度情報化社会、Fingerplan2007など新たな課題に取り組んできた。九州より小さい国、173mが山！の国も、近年、土地の値上がりで高齢者の住み続が困難になるなど厳しい現実にもさらされているという。住宅難から、マルメ

からコペンヘ通勤する人もいる様子だ。「ヒュッゲ」な暮らしはどうなっていくのだろうか。デモクラシの国は「問題は話し合って解決する」のだろう。再訪したい国である。

さて、本の紹介。中島さん編著の「デンマークのヒュッゲな生活空間」には福田成美さんも書いています。住まい・高齢者住宅・デザイン・都市計画についてはぜひ！そちらをお読みください。「ヒュッゲ」は和訳できない！そうだ。デンマーク独特の豊かな暮らしのある意味深い言葉のようだ。



## ■役員会報告

2015年度第2回7月3日 第23回2015年度総会報告 第2回囲碁まつりにて「どこでもカフェ」報告 この指とまれ「ヤマボウシの家見学会」と「デンマークの住まいとまちのデザイン」報告 第63回海外交流会遠藤氏による「ライトの落水荘とユースニアンハウス」準備 パージニア世界大会準備 大会におけるアンケート調査準備 岩泉だれでもフォトグラファー報告 ネパール大地震への支援について NL100記念号7月1日発行、配布先検討 2015年度第3回9月24日 第18回パージニア世界大会報告 第63回海外交流会報告 大会におけるアンケート調査継続作業手伝い募集 ネパール大地震への見舞金譲渡報告 モバイルキッチン・イン・法末への案内 この指とまれ「カップマルタン休暇小屋と足袋つくりの街」案内準備 NL102号編集報告

## ■編集後記

今年もあとわずか、静かに1年が過ぎますように(薄井)年に1度、仲間が集う。明々と照らす提灯、酉の市(須永)あれよあれよと日々過ぎるも日々新たな課題と向き合う日々。NEWSLETTERも102歳！103号への寄稿お待ちします(渡邊)法末での秋の味覚モバイルキッチン、盛況でした。おいしいことは良いことだ！(宮本)U・S・A大会とブルガリアを巡り現代建築を刺激する一つのルーツを垣間見る(井出)現場対応とPCばかりの中、目に飛び込む紅葉と秋バラの色を見惚ける(神村)編集作業で世界大会を疑似体験。マヤ・リンの提案資料は実物みてみたいです(飯田)